

# 総称定冠詞の用法と LANGUAGE SITUATIONS

—— 複数名詞との結びつきを中心に ——

渡 辺 時 夫

## 1

Otto Jespersen は、冠詞と名詞の結びつきに着目して、総称を表わす場合を次のように5つのキャテゴリーにまとめている。

- (1) the singular without any article: *man* is mortal;
- (2) the singular with the indefinite article: *a cat* has nine lives;
- (3) the singular with the definite article: *the dog* is vigilant;
- (4) the plural without any article: *dogs* are vigilant;
- (5) the plural with the definite article: *the English* are fond of out-door sports.<sup>1</sup>

さて、(1)については、living things に関する限り *man* と *woman* しかあてはまらないので一応除外<sup>2</sup> するとして、(2)——(5)は、いかなる言語使用上の場 (situation) に於ても interchangeable であろうか。

Henry Sweet は、“A noun accompanied by this article (=an indefinite article) may be put in the plural without change of meaning.” と述べて、*a hill* is the opposite of *a valley* と *hills* are the opposite of *valleys* の2文をその具体例として掲げている。<sup>3</sup> しかし、総称としての *a hill*=*hills* の公式はいかなる situation においても成り立つものであろうか。次の例を見てみよう。

Yes. But have I any chance? Can *a perfectly unknown man* hope to get in?<sup>4</sup>

*a perfectly unknown man* は総称的 *a* の形をとっているが、話し手は総称というペールをかけて話しているだけであって、心の中では自分自身のことを考えているのである。すなわち彼の意味することは、Can I who am ... ? ということである。従ってこのような場合は Sweet のように *a perfectly unknown man*=*perfectly unknown men* であると単純には認めがたい。しかし Sweet は次の例における *the* と *a* の substitutability を一応認めながら、下記のような記述を付け加えている。

*the lion* is the king of beasts

*a lion* is the king of beasts

“..... the definite article is more emphatic. It emphasizes a quality or makes the individuals of a class more prominent.”<sup>5</sup>

従って、Jespersen による分類のうち(2)と(3)とは厳密に云えば different shades of meaning を持つことになり、用いられるべき場もおのずから異るとも云える。

更に、金口儀明氏は、「主語に於ける冠詞+名詞」<sup>6</sup> の中で、「……明かにしておきたいこ

とは冠詞の使用又は省略（複数名詞の前で）ということが(1)『語』との関係に於てばかりでなく、(2)『文』の形式乃至意味内容との関係においても考察しなければならないということである。」と述べ、(A)「英国人は保守的である」(B)「英国人は信義を重んずる」の2文の英訳としては、次のものが妥当だとし、下記の通りその理由を説明している。

A. *The English* (The English people, or The English nation) are conservative.

B. *Englishmen* (or English people) respect faith.

Aの場合

「The+単数普通名詞」は“formal”で、“philosophical”.「A+普通名詞」よりも力強い。この特色のある主語は一般に断言的な力を持つ述語を伴うことによって、即ち一般的真理又は事実を表わす平叙文中に於て用いられる。併しながら、断定よりも控え目を好む英国人が「定冠詞+単数普通名詞」を用いるのは一般に承認された陳述、又は相手（読者）が承認する種類の陳述の場合に属する。そして文語的で colloquial でないなどの理由から *The Englishman is conservative* の訳文をさけた。

Bの場合

The を用いると統一体の観念を与えることになり、この場合は陳述内容から判断して断言的になりすぎる嫌いがある。又無冠詞の場合は colloquial でもある。この場合金口氏は、総称の表現形式の選択にあたって the の持つ本質的な意味、英国人の気質、文体などを考慮に入れ、Jespersen の(1)―(5)の総称表現形式は、interchangeable と単純に考えるわけにはいかないことを示唆している。

このように見てくると、総称を表わす冠詞の用法を論ずる場合、単に冠詞と「語」との関係だけを論ずるだけでは不十分であり、冠詞と「語」とをとりまくもっと大きな言語使用上の場(situations——文体、文脈、心理 etc.)という観点から検討する必要があることがはっきりしてくる。そこでこの小論では、複数名詞（又は名詞相当語）が総称を表わす場合の定冠詞の有無に限り、言語使用上の場との関連を検討しようとするものである。

まず O. Jespersen, H. Poutsma, P. Christophersen, W. Chafe がそれぞれこの問題をどのように扱っているかを見てみよう。

## 2. O. Jespersen の場合

Jespersen は、小論の冒頭に掲げた5つのキャテゴリーのうち(4)については、“Generic plural without an article is very frequent.”として、*Owls cannot see well in the day time. Be ye therefore wise as serpents and harmless as doves.* を掲げ、(5)に関しては次のように記述している。

“The plural with the definite article in the generic sense is nowadays used chiefly with adjectives: *the old* are apt to catch cold (old people are .....)?”

更に、この方法によっては現在 a substantive cannot any longer be used in a generic sense.”<sup>8</sup> と述べ、Bacon には the physicians と the philosophers という表現が総称の意味で使われているが、現在ではそれぞれ、physicians, philosophers と表現すべきだと述べているだけで、両者の用法を situation との関連から記述してはいない。これに対し P. Christophersen は、「the+複数名詞の形が全種族をあらわすのに用いられることも多

い」としている。「ひとつのグループの人々をあらわす語の前にも *the* がつけられる。それは彼らが一体として行動している時である。」といふ Jespersen と同じ *the philosophers* を次のように引用していることは興味深い。

He was a person, because whatever *the philosophers* may say, there is nothing so integrating as character.<sup>9</sup>

Jespersen は又複数形が定冠詞と結びついて総称の意味を表わす語として *nationalities* をとりあげ次のように分類している。これはあくまでも *a special class* だと断っている。

A. *adjectives of nationality* が冠詞を伴って, *the whole nation* を意味する場合

a. *-sh* (語尾が *sh* の *adjectives*) 及び *French & Dutch*

ex. *the Irish, the Welsh, the French, etc.*

*the Spanish* が *the Spaniards* にとって代りつゝある。

b. *-ese* (語尾が *ese* の *adjectives*) 及び *Swiss*

ex. *the Japanese, the Andamanese, etc.*

ただし *Chinese* と *Chinamen* は無差別に用いられる。

c. Sometimes the adjective is used without any defining word

*The blood of English shall manure the ground.*

B. 語尾が *men* の名詞に *the* のついた形, 又は *the — people* (ex. *the British people*) の形はほとんど常に *individual members of the nation* を示す。Shakespeare が *the Englishmen* を総称の意味で用いたのはたった一度だけ *the Frenchmen* は10回だけである。

C. 語尾が *ese* の単語には, *Englishmen* に相当する形がないので (*the + -ese*) は *individual members* を表わす場合にも用いられる。

D. All the other names of nationalities take a plural in *-s* both when denoting the whole nation and individuals: ex. *Greeks, Germans, Russians, etc.*

E. An adjective is very often put in the plural (unchanged) with the definite article to denote the whole class: *the poor* as distinct from *the poor ones* (which singles out some among those just mentioned)<sup>10</sup>

Jespersen は単に *the* と結びついて総称の意味を表わす語にどんなものがあるかを考え整理しているだけで, 言語の使用場面との関係についてはほとんど触れていない。上記の内 D を例にとって考えてみよう。

Sweet は *the Russians do not like the Germans* を例にあげて, “With collective nouns and plurals the definite article emphasizes the idea of collectiveness, suggesting that of the ‘whole body of ...’” と説明している。<sup>11</sup> 最近の例では AP correspondent の Jeff Bradley は “Why foreigners are flying into Britain ?” という論文の中で, *The Arabs* を総称の意味で次のように用いている。 *The Arabs are biggest spenders of all, spending an average of \$ 720 each, an estimated \$ 360 millions this year out of total projected earnings from oversea visitors of £ 1.75 billion (\$ 3.15 billion.)*”<sup>12</sup>

*The Russians* と *Russians* (あるいは *the Arabs* と *Arabs*) がそれぞれ *the whole nation* を意味する場合のあることはこれで明らかである。しかし *the Russians* と *Rus-*

sians はそれぞれどのような言語の使用場面で用いられるべきかという疑問は依然として残る。これ等の記述を通してはっきりしたことは、Jespersen は総称冠詞の用法を、主としてそれと結びつく名詞の種類という観点に限定していることである。たゞ冠詞の用法を situation (言語使用の場 …… 文体, 文脈, 心理, etc.) との関連からとらえているものとして Jespersen には次のような記述がある。

- (1) “Substantives in the plural with the definite article are used in scientific or quasi-scientific descriptions to indicate more definitely than the forms mentioned above (=generic plural without an article) that the whole class is meant:

*The owls* have large eyes and soft plumage.”<sup>13</sup>

しかし、上例における *the owls* のように、*the+plural* が総称を表わしている場を更に詳しく観察すると、*the owls, etc.* と他の *species* (又は *group, class, etc.*) との対照という強い意識が働いていることが多い。従って、他の *species* との差異 (contrast) を厳密に記述しなければならない scientific descriptions にはこの総称の形がよく用いられるのは当然だとも云えよう。次の例文を見てみよう。

Their favorite prey are zebras and antelopes. *Males and females* often work together. *The females* may lie hidden, waiting quietly while *the males* drive the antelopes or other animals toward *the females*.<sup>14</sup>

対照の意識が弱い最初の *males and females* には定冠詞はなく、それぞれの役割の特色を意識的に対照させている 2 番目の *males* と *females* に定冠詞を用いている。

- (2) “The absent may be used in this way; ‘*the absent* are always at fault.’ But *the present* cannot be so used, partly because it might be mistaken for the sb (gift.)”<sup>15</sup>

冠詞と名詞との単なる結びつきにとどまらず、言語を使う者の心理にまでたち入って記述したものと注目される。

- (3) “After we and you the plural Englishmen, etc. can also be used for the whole nation.

*You Frenchmen* are living on a powder magazine.”<sup>16</sup>

*The Frenchmen* → individuals

*You Frenchmen* → 総称

} 文の構造と総称的意味の関係を扱ったものである。

### 3. H. Poutsma の場合

“Before plural nouns when denoting a class of persons, animals or things in a generalizing way, the definite article is mostly used. Thus we find it normally in the following quotations.” として While man is very little higher than *the beasts*, he is also very little lower than *the angels*. 以下およそ 10 個ぐらいの examples をのせているが、冠詞なしの plural が総称をあらわす場合との比較等にはほとんど触れていない。<sup>17</sup> 例えば上記の一例をとってみても man is very little higher than *beasts* とした場合の意味の差異や、使われるべき situations との関係はどうであろうか。たゞし Jespersen と比較すると、定冠詞の有無を決定する条件について、Note の形をとってかなり系統的に

言及していると云える。例えば、

- (1) “Sometimes the absence of the article may be due to the noun assuming more or less the vagueness of an indefinite pronoun.”<sup>18</sup> として次のような例を掲げている。If the English tongue should ever die out, *future generations*<sup>19</sup> would have to learn English as a dead language in order that they might read Milton. 尚このような名詞は、ほとんどが subjects としての働きをしており、objects 又は other grammatical functions としてあらわれることはまれであると述べ文中における機能との関係にも触れている。

- (2) (主として Verse においてであろうが) Meter による制限に触れ “Sometimes the use or absence of the article is conditioned by the meter” と説明し、次の例を掲げている。

Men are God's trees, and women are God's flowers, / And  
when the Gascon wine mounts to my head, / *The trees* are all the statelier, and  
*the flowers* / Are all the fairer.<sup>20</sup>

trees と flowers に定冠詞を付することによってきれいな Iambic meter を形成している。

- (3) さて、Poutsma は Jespersen の分類による1.(4)と1.(5)における用法について、次のように述べ、その用法には明らかに何らかの差異のあることを “sometimes” という語によって暗示しているものの(4)でとりあげる文構造上における用法の差異を除けば、どこにもその差異についての記述がない。

“But in like manner as the indefinite article, as a weak *any*, is sometimes practically equivalent to the generalizing definite article, plurals without the article are sometimes used in, apparently, the same meaning as plurals with the generalizing definite article.

When *leaves* fall and *flowers* fade, great people are found in their country seats.”<sup>21</sup>  
以上のような記述だけでは、例えば次のAとBは同じ意味を持つが、CとD及びEとFについては、それぞれの pair が、かならずしも同じ意味を表わしていないことの説明ができない。

A. *The Indians* migrated into North America from Siberia.

B. *Indians* migrated into North America from Siberia.

C. *The Indians* like corn.

D. *Indians* like corn.

E. *The typewriters* have been overrated.

F. *Typewriters* have been overrated.<sup>22</sup>

AとBに関しては、インディアン (the whole race) がシベリヤから北米大陸に大移動したという史的事実是一般に認められていることであるが、like corn の場合はそうではない。その上Cに関しては The Indians who live in Arizona という可能性もあり得るのでCの The Indians は総称なのか particular Indians なのかあいまいである。従って、Indians の総称的意味を論ずる場合には、述部と関連させた記述がなければならない。次にEの the typewriters は the Indians とちがひ総称ではない。typewriters

は、the によって限定された the typewriters の部分が非常に大きくなって the typewriters が使用される瞬間に存在する全部の typewriters を包含するという見込みはほとんどなく the typewriters は明かに particular typewriters を意味するからである。云い換えれば総称的な意味で、typewriters のことを述べようとする場合に、the typewriters という表現を避ける可能性が大きいということになる。このことから定冠詞を伴って総称を表わし得る「語」には必然的に制限のあることが解る。しかし Poutsma はこのような制限については言及していない。

- (4) Poutsma は又 Jespersen による分類の1.(4)と1.(5)の用法の差異を文構造の上から次のように説明している。

“Regular is the suppression of the definite article before plurals used in a generalizing sense after a superlative, when the notion of comparison with other specimens of the class is obscured, i. e. when little more is meant than a high degree of quality expressed by the adjective. Thus English is *the easiest of languages*.”<sup>23</sup>

更に、

A. a noun expressing a high degree of excellence と

B. a singular noun identical with the plural も前述の superlative と同等の働きをすることがあるとして、それぞれ次のような例を掲げている。

A. の例 I lived with *a king of men* and did not know his greatness.

B. の例 Acquiescence in things as they are is *the sin of sins*.

#### 4. P. Christophersen の場合（一色マサ子訳述による）

名詞の分類法について、Jespersen の thing-words の代りに unit-words (単位語), mass-words の代りに continue-words (連続語) をそれぞれ用いているだけで分類の仕方そのものは Jespersen と変っていない。しかし任意の与えられた situation に対し Jespersen による5つの分類の中のいずれを選ぶべきかについて、いくつかの興味深い分析をしている。こゝでは小論が扱っている範囲である1.(4)と1.(5)の關係に言及しているものに限って紹介したい。

- (1) 「無冠詞形と the の形とが、連続語においても複数形においても時折対抗するが無冠詞形は種族の概念を制限しないものとして考える時に用いられ、the の形は判然としたものを指すときに用いられる。が一方 the の形が全種族をあらわすのに用いられることも多い。たとえば、博物史の本などでは *the lions* というのが普通である。これは無冠詞形よりも一層正確に感じられる。」<sup>24</sup>

この説明は、Jespersen と overlap している部分はあるが、無冠詞形 (ex. lions) と、the と語びついた複数形 (ex. the lions) とが総称を表わす場合の意味の差異を、Jespersen よりも更に詳しく記述したものと云えよう。しかしながらこれだけの説明では、例えば

*The typewriters have been overrated* における typewriters や *The Indians like corn* における Indians が particular typewriters や particular Indians を意味するのか、それ等の語が総称としての意味を有するのかを説明することができない。<sup>25</sup>

ただし「ひとつのグループの人々をあらわす語の前にも the がつけられる。それは彼らが一体として行動している時である。」という部分は、単に冠詞を「語」との結びつきだけでなく、もっと大きな場面との関係に照らして記述したものといえる。例えば

No sooner had Jimmy Carter chosen Walter Mondale as his running mate than the Republicans moved to make big-spending liberalism the issue of the fall campaign.<sup>26</sup> における the Republicans などには正にその典型的なものとして説明することができる。

- (2) 複数形の普遍化という現象と関連して次のように述べている。

「複数形においても或る種の語が特に無冠詞の形をとることがあるらしく、特に次のような語に多いようである。

ministers, times, appearances, conditions, circumstances, affairs, things, matters, relations 等。接続語における times や days は特に著しく、しかもこれらはその前に附加詞がついている時に多い。……from Roman times, Anglo-Saxon days 等。<sup>27</sup>

- (3) the の形の複数形は限定を示し、それは無冠詞で示されたものの中の特異な部分で明確に限定されたものであるが「制限された部分が非常に大きくて、the の形を用いている瞬間には存在する全種族に等しい意味となってしまうような場合もある。」といふ、lions と the lions, Italians と the Italians の間に差異がないと結んでいる。<sup>28</sup> これはあとで触れる W. L. Chafe の「有境界」(bounded) の説明と極似している。

## 5. W. L. Chafe の場合

総称に関する Chafe の提言の中で最も画期的なものは、名詞が総称か否かは、その名詞が付け加えられている動詞によって自動的に決定されるということである。“the generic or non-generic nature of a noun is not something that is established by a choice within the noun at all; it is something that is automatically determined for the noun by the verb to which the noun is attached.”<sup>29</sup>

次の2つの例文について云えば、

A. *An elephant* likes peanuts.

B. *An elephant* stepped on my car.

Aの動詞は総称であるが、Bの動詞は総称ではないとされる。

更に、Chafe は総称の概念を扱う際に、定 (Definite) という概念を導入している。“*Definite* means that the speaker assumes that the hearer already knows which member or members of the class is being talked about.”<sup>30</sup> 非定名詞が総称動詞に伴う時には総称であり、それ以外の時は非総称であるという仮説をたてている。従って論理的に云えば、“*Definite*” と “*Generic*” は相容れないわけであるが、次の例を見てみよう。

C. *The elephants* like peanuts.

D. *The Indians* like corn.

Cの例は意味の上であいまいさが無い。Definite で複数でしかないのであって、総称ではあり得ない。しかしながらDの例は2つの異なる意味構造を反映していて、意味があいまいである。その一つは *The Indians who live in New York* like corn. という文中に

における *The Indians* と同じ意味を持つものであり、Cの *The elephants* 同様総称ではない。Dのもう一つの意味では *The Indians* は総称の意味を持っている。

E. *The Indians* migrated into North America from Siberia. 中の *The Indians* 同様 *Indians* 全体が問題にされている。ここで Chafe はEの文に見られるような総称性を説明するために有境界 (bounded) という概念を導入している。

“There seem to be certain noun roots, among them Indian, which designate a class whose boundaries are implicitly known. It is evidently part of our conceptual apparatus that the class of Indians is well defined in a way that the class of elephants is not. Obviously we cannot call every Indian by name, but we seem to think of Indians as constituting a bounded set. Many noun roots of this kind are spelled with a capital letter, but not all are.”<sup>31</sup>

Chafe はこの有境界名詞の中に *the Japanese*, *the Republicans* 等を含めていることは明らかである。しかし特定の名詞が「有境界の集合」と見なし得るかどうかという点になると、その判断はそう単純ではないであろう。Chafe は次のような例を掲げている。

F. *The hippies* have long hair.

G. *The computers* have been overrated.

H. *The typewriters* have been overrated.

Chafeによると、FとGについては総称を表わす可能性はあるが、Hにはその可能性はない。typewriter は elephant と同様 unbounded group であり、“Computer may be expected to pass into that before long.”<sup>32</sup> とつけ加えている。ここで bounded group と unbounded group の境界はどこにあるのかという問題は残る。しかしながら、

Jespersen による5つの分類の中の1.(4)と1.(5)との関係について  $\left\{ \begin{array}{l} \text{bounded} \\ \text{definite} \\ \text{plural} \end{array} \right\}$  という観点

からとらえ、しかも動詞との関連から追及した研究は、冠詞のあたらしい研究の方向として評価できる。たゞ、「名詞が総称であるか否かは、名詞が付け加えられている動詞によって自動的に決定される」という Chafe の仮説には問題が残ると思う。次の例を見てみよう。

I. *The Americans* behave differently from us Japanese.

J. *The Americans* behave differently from the Americans we met in Hong Kong.

Iは総称を表わしているがJは総称ではない。このことは、単に動詞だけに限らずもっと大きな場との関係から研究する必要性を暗示している。前掲の *The Indians* migrated into North America from Siberia. についてみると、 $\left\{ \begin{array}{l} \text{migrated into North America} \\ \text{migrated from Siberia} \end{array} \right\}$

の2つの意味構造が *The Indians* の  $\left\{ \begin{array}{l} \text{bounded} \\ \text{definite} \\ \text{plural} \end{array} \right\}$  の屈折と結びついて「総称」の意味を

生み出しているのであり、*The hippies* have long hair についても、hippies と long hair との semantic association により、「総称」が表出されたものと考える。



## 6. ま と め

総称定冠詞の用法と言語使用の場との関係を the plural with and without the definite article に焦点をあて、具体的に検討を加えてきた。この小論でとりあげた四人の grammarians はそれぞれ定冠詞の用法について興味深い側面を披瀝しているが、いずれの grammarian も、定冠詞が用いられる場 (situation) に焦点をあてた組織的なまとめ方は試みていない。そこで次のような提案をしてこの小論のまとめとしたい。

## (1) 定冠詞を必要とするもの

次の A — B の対象となる語は、plural であって、Chafe のいわゆる bounded の屈折を持つものである。しかし、bounded の屈折という表現は、やゝ抽象的すぎるきらいがある。対象が生物の場合には、その種の individual members が一体として行動しているという心象を与え、無生物の場合は、その specimens の数が比較的小さく、心理的に全体が一つのまとまりとして把握できるものである。

## A. 文体と関連のあるもの

- a. formal な文体の場合。philosophical, literary な性格を持ち、内容的に見て一般の同意の得られるような場合。断言的である。

*The English* are conservative. は一般的にみて同意の得られるような内容だから良いが、その点 *The English* respect faith. は内容的に問題がある。

## b. Scientific description の場合

動植物などについて、より科学的 (rigorously) に描出しようとする場合。

*The owls* have large eyes and soft plumage.

## B. Context と関連のあるもの

- a. ある種全体の individual members が一体となって行動しているような場合

Any day now *the flickers* will be gathering in restless flocks, preparing to migrate.<sup>33</sup>

この場合の *the flickers* は Chafe のいう bounded set の典型。しかも「これから暖かい国を目指して、同時に飛びたとうとしている渡り鳥」の心象が強い。

消極的な意味における「一体となったの行動」の例としては、次のようなものが考えられよう。

Since one story was given up to this occupation, it seems likely that in Canton at least *the authorities* turned a partly closed eye to what was going on.<sup>34</sup>

- b. 異質な種、グループ、etc. と意図的に対照して用いられる場合

*The Russians* do not like *the Germans*.

次の例は *lion* についての解説の中で雌雄の役割のわかれている様子を対照的に描いたものである。

*The females* may lie hidden, waiting quietly while *the males* drive the antelopes or other animals toward *the females*.<sup>35</sup>

No sooner had Jimmy Carter chosen Walter Mondale as his running mate

than *the Republicans* moved to make big-spending liberalism the issues of the fall campaign.<sup>36</sup> この例になると *the Republicans* v. s. *the Democrats* なのか、「一体として行動している」group としての the なのかやゝあいまいであるが the が要求されることは事実である。

c. nationality を表わす語

おゝむね B. a. に含めてもよいが、Italians, Russians などは B. b. に含めても良いだろう。この場合は contrast の意識がどのくらい強いのか、あるいは一体となって行動しているという心象があるかなど、英語を使う者の心理的側面に左右されることが大である。ただし the Englishmen などは「英国人」の意味で総称に用いられることはまずない。

(2) 定冠詞を必要としないもの

A. 複数形による総称表現のうち(1)で述べたような制限を持たないもの。

*Dogs are vigilant.*

*Owls cannot see in the daytime.*

B. 構造上・機能上の制限を持つもの

a. 総称的な意味で用いられた複数形が最上級を示す形容詞の後に来る場合；ただし、この場合の形容詞は、文字通りの最上級の意味ではなく、単に、その語の持つ性質の程度が高いことを示しているだけである。次の例を見よう。

(a) English is *the easiest of languages*.

(b) English is *the easiest of the modern languages*.

(a)は English is *a very easy language*. の意味であり

(b)は Of the modern languages English is *the easiest to acquire*. の意味である。

b. 最上級の代りに a high degree of excellence を表わす名詞が用いられる場合もある。

(a) I lived with *a king of men* and did not know his greatness.

(b) *a prince of dreamers*

c. 同じ種の他の specimens との比較という意識が強い場合。

(a) *The greatest of faults* is to be conscious of none.

(b) Rotterdam is *the most enterprizing of Dutch cities*.

d. nationality を示す複数の語が人称代名詞の直後に置かれる場合。この中には、(1)

c. で触れた Englishmen, Frenchmen, etc. も含まれる。

(a) The Americans behave differently from *us Japanese*.

(b) The Americans don't appreciate arts so much as *we Frenchmen*.

e. simile が複数の形をとった場合

(a) He moved *like a crab*. ⇒ (a') They moved *like crabs*

(b) A cat is not *as vigilant as a dog*. ⇒ (b') Cats are not *as vigilant as dogs*.

(b)について Jespersen は “the article may be considered as a weaker *any*, or rather one (“a”) dog is taken as representative of the whole class.”<sup>37</sup>

と云っている。Sweet も同じ意味の説明を与え、この a + 単数名詞は、意味を変えずに、冠詞なしの複数名詞に変え得るとつけ加えているが simile の場合には、この語

明がびったりあてはまる。

f. 次のように simile との関連で用いられる場合。

“But also the probable switch from *moderate Democratic leaders like Mike Mansfield* in the Senate and Speaker Albert in the House to *more partisan Democratic leaders like Sen. Robert Byrd of Western Virginia.....*”<sup>38</sup>

g. その他

次のような語が indefinite pronouns の性格を帯び、又は漠然と一般的なことを意味する場合 (Christophersen のいわゆる普遍化)。

(a) *Matters* are not so bad as that.

(b) *Things* jarred between them frequently.

(c) *Appearances* are at least against you.

これに類する語には次のようなものがある。chaps, fellows, Persons, affairs, circumstances, etc.

(3) その他

A. Verse などにおける meter による制限。

B. 新聞・雑誌等の headlines における冠詞の省略。

C. psychological aspect of language use

*the absent* は普通に用いられるが *the present* はほとんど用いられない。*the gift* との混同を招かないため心理的に避けているものと考えられる。

「心理的」ということになれば、言語の使用全般に及ぶわけで、冠詞の用法もその例外ではない。言語使用者はその時その時の心理状態により、定冠詞をつけたりつけなかったりという現象は大いにあり得ることである。この小論をまとめるにあたり数多くの native speakers に informants として協力をいただいた。しかし、定冠詞の用法に関し native speakers 同志の間に数多くの意見のくい違いがあり、言語使用にあたって inner world の占める割合の大きさを痛感した。この小論の中にもその意味で、多くの dogma が入っていることゝ思う。大方のご叱正をたまわりたい。

## 注

- (1) O. Jespersen: *Essentials of English Grammar*, George Allen & Unwin LTD, London (1933) p. p. 212-213  
: *The philosophy of Grammar*, George Allen & Unwin LTD, London (1924) p. p. 203-204
- (2) O. Jespersen: *Essentials* p. 213
- (3) H. Sweet: *A New English Grammar part II (Syntax)*, Oxford at the Clarendon Press, Great Britain, (1898). p. 62
- (4) P. Christophersen: 『冠詞』(一色マサ子訳述), 研究社 (1958) p. 96
- (5) H. Sweet: *A New English Grammar*, p. 58
- (6) 金口儀明: 「主語に於ける冠詞+名詞」『英語青年』第99巻10号 (1953) p. p. 474-476
- (7) O. Jespersen: *Essentials*: p. 214
- (8) —: *A Modern English Grammar part II*, Einar Munksgaard, Copenhagen (1913), p. 135
- (9) P. Christophersen: 『冠詞』 p. 101

- (10) O. Jespersen: *A Modern English Grammar II*, p. p. 277-281
- (11) H. Sweet: *A New English Grammar part II*, p. 59
- (12) *The Asahi Evening News* (August 18, '76)
- (13) O. Jespersen: *Essentials*, p. 214
- (14) *The New Book of Knowledge*, Grolia, "lion" の項目
- (15) O. Jespersen: *Mn. E. G. II*, p. 277
- (16) *Ibid.*: p. 280
- (17) H. Poutsma: *A Grammar of Late Modern English Part II IA*, P. Noordhoff, Groningen, (1914) p. 594
- (18) *Ibid.*: p. 595
- (19) *Ibid.*: p. 657
- (20) *Ibid.*: p. 593
- (21) *Ibid.*: p. 595
- (22) W. Chafe: *Meaning and the Structure of Language*, The University of Chicago Press, Chicago, (1973) p. p. 196-197
- (23) H. Poutsma: *Part II IA* p. 596
- (24) P. Christophersen: 『冠詞』 p. 101
- (25) W. Chafe: *Meaning and the Structure of Language*, p. p. 196-197
- (26) Tom Wicker: *The mondiale Gamble*, The New York Times, July 18, '76
- (27) H. Poutsma: *Part II IA* p. 657
- (28) P. Christophersen: 『冠詞』 p. 21
- (29) W. Chafe: *Meaning and the Structure of Language*, p. 189
- (30) *Ibid.*: p. 196
- (31) *Ibid.*: p. 197
- (32) *Ibid.*: p. 197
- (33) *editorial*, The New York Times, Sep. 5, '76
- (34) Richard Harris: *Chinese Dropout*, The Times, London, August 30, '76
- (35) : (14)と同じ
- (36) : (26)と同じ
- (37) O. Jespersen: *The Philosophy of Grammar*, p. 203
- (38) James Reston: *GOP Nightmare*, The New York Times, July 6, '76

## BIBLIOGRAPHY

- BIARD. A. : 『定冠詞論』 (厨川文夫訳), 研究社 (1957)
- CHAFE, Wallace: *Meaning and the Structure of Language*, The University of Chicago Press, Chicago (1973).
- CHRISTOPHERSEN, Paul: 『冠詞』 (一色マサ子訳述), 研究社 (1958)
- CURME, George O: *A Grammar of the English Language (Syntax)*, D.C. Heath and Company, America, (1931).
- JESPERSEN, Otto: *A Modern English Grammar Part II*, Einar Munksgaard, Copenhagen, (1913)
- : *The Philosophy of Grammar*, George Allen & Unwin LTD., London, (1924)
- : *Essentials of English Grammar*, George Allen & Unwin LTD, London, (1933)

- : *A Modern English Grammar Part VII*, Einar Munksgaard, Copenhagen, (1949).  
 金口俊明:「主語に於ける冠詞+名詞」『英語青年』Vol. XCIX-No. 10 (1953) p. p. 474-476  
 中村六男:「英語の冠詞の総称的用法に関する試論」『信大繊維学部研究報告第1号』(1951) p. p. 156-174)  
 POUTSMA, H ; *A Grammar of Late Modern English Part II IA*, P. Noordhoff, Groningen, (1914).  
 SWEET, Henry: *A New English Grammar Part II (Syntax)*, Oxford at the Clarendon Press, Great Britain, (1898).

## Summary

### Generic Uses of the Definite Article in Connection with Different Language Situations

— with Particular Emphasis on Plural Nouns with and  
without the Definite Article —

Tokio WATANABE.

According to Otto Jespersen "an assertion about a whole species or class can be made by means of *every*, *any*, or *all* with the plural. Very often however, the generic character is not thus expressly indicated, but implied, and curiously enough language for that purpose uses now the singular, now the plural, now a definite and now an indefinite form, as will be seen in the following synopsis:

- (1) the singular without any article: *man* is mortal;
- (2) the singular with the indefinite article: *a cat* has nine lives;
- (3) the singular with the definite article: *the dog* is vigilant;
- (4) the plural without any article: *dogs* are vigilant;
- (5) the plural with the definite article: *the English* are fond of out-door sports;"

In this paper I have picked up (4) and (5) in particular and tried to compare one with the other especially in terms of the language situations in which one of them is used but not the other.

Now it is very important for users of English to be sure what kind of words are to be combined with the definite article to mean 'the whole body of....' However, it is no less important to know in what language situations (4) or (5) is to be used. For example, it is perfectly all right to say, "*Lions* are the king of the beasts," meaning *lions* as a whole species but it would be better to say *the lions* when we try to describe *lions* scientifically.

Take a look at the following quotation from The New York Times; "Any day now *the flickers* will be gathering in restless flocks, preparing to migrate. *Goldfinches* already are ripping thistle heads apart." As to *the flickers* ready to fly away at the end of the season it is very easy to conceive of them as one group moving

together. On the contrary *goldfinches* are not moving in one group like *flickers*. In these circumstances *the flickers* is used but the author does not write *the goldfinches* because he is not considering their activity as a group effort. However we must be well aware that in some other language situations *the flickers* do not mean the whole body of the species but only its particular members.

So when we are to use plural nouns to denote “the whole body of...” we must be sure of what contexts or situations require the definite article and what do not.